通心１８１号　　令和２年３月２３日

未来創造

今年度も残すところあと２日です。この三連休は、なんだかとっても長く感じました。ただ、久々に休日の部活動を行えたのはとても嬉しかったです。今の時代、部活動も日々変化しています。練習の様子を動画で撮影して自分で確認したり、練習メニューを自分たちで考えて、こまめにコミュニケーションをとりながら練習したり…。一から十まで指導者に教わって、言われた練習をひたすらやる、というあり方が当たり前ではなくなってきていますね。今の時代に合わせて、使えるものをフルに使って、知恵と工夫で改革していきたいと思いました。さて、この通心も残すところ今日と明日です。臨時休業が終わったことでこうして書き続けられる幸せを感じながら、書きたいことを書いていきます。今日は自分の原点とも言える喜多川泰さんの話です。勉強のあり方もこれから変化していくかもしれませんね。

勉強という『道具』にも使い方がある

すべての道具には使い方というものがあります。いい使い方をしている限り、人間の生活を豊かにしてくれます。

たとえば、どこのご家庭にも包丁がありますよね。「危険だからうちは持ちません」という家はないと思います。

ところがこれ、間違った使い方をすると人を傷つけることだってあります。包丁やナイフなどは分かりやすいと思いますが、実は、携帯電話やパソコンだって同じです。確かに便利なものですが、使い方を間違うと多くの人を一度に傷つけてしまう機能を持っているわけです。

だから、携帯電話をお子さんがほしいと言ってきたら、「はい、どうぞ」と無条件で渡す親っていないと思います。「こんな使い方しちゃダメよ、分かった？」とか言うんじゃないかと思うんですね。

でもこれは道具そのものが悪いのではなく、それを使う人間の心の問題なんです。

ただ、勉強という「道具」に限っては結構無条件で「いいもの」と思っていませんか？

ぼくは「道具」という意味では勉強も全く同じだと思っています。上手に使えば勉強したことはすごくいい道具になります。でも使い方を間違えると、いろんな人を傷つけたり、時には自分自身を傷つけることだってあるとぼくは思っています。

勉強って、出てきた問題を自分の頭で考えて、答えを探していかなければなりませんよね。一つひとつの問題を乗り越えて答えを見つけることの楽しさを覚えたら、こんなに楽しいことはないのです。

大人になるといろんな問題に直面することが多くなります。そのときに「どうやったら乗り越えられるかな」と考える習慣がついている人は、人生をきっと楽しめると思います。

でも残念ながら、今までの勉強のあり方というのは、ちょっと違っていたような気がするんです。点数とか合格とか成績というものを手に入れるために、「聞けば教えてくれる」という使い方をしたんじゃないかと思うんです。

「分からない」と言うと、「こうなんだよ」と教えてくれる。そういう先生がいい先生かと言うと、ぼくは違うんじゃないかと思うんです。

分からなければ誰かが教えてくれるという習慣を持って育った人は、社会に出て、答えの分からない問題にぶちあたったとき、乗り越えられずに挫折してしまうような気がするのです。

答えというのは、ある意味、ずっと出なくてもいいとぼくは思っているんです。

たとえば、この先この国はどうなるのか、すごく不安です。誰かに聞きたくなります。今まで「分からない」と言えばすぐ教えてくれるような環境で育った子は、それが分からないのでイライラします。

こういう問題って答えが出るまですごく時間が掛かります。時間が掛かることに慣れている人は考えて考えて、5年経ち 10 年経ち、なかなか答えが出ないけれども、それでも考え続けられるんです。考えること自体がすごく楽しいからです。

子どもたちが大人になってから、そういう答えの分からない問題に出合ったとき、大事なことは考え続けることです。

たとえすぐに答えが出なくても笑顔や優しさを失わず、自分の課題に挑戦する勇気を持って行動することだと思うんです。そういう力を勉強を通して獲得してほしいとぼくは思っているんです。

『日本講演新聞』より

「勉強が分からない」「どうしたらいいか分からない」「具体的に何をすればいいか分からない」…こんなこと、ありますよね。こうなった時、私たちは「だから自分はダメだ」と思いがちです。でも、そんなことはありません。むしろ逆です。分からないということは「これから分かるようになる」可能性に溢れているということ。大切なのは、いつ出合えるか分からない答えを探し続けるかどうかです。これを諦めずに追い続けられる人は、いつになるかは誰にも分かりませんが、いつか必ず答え合わせをする瞬間が訪れると思います。分からないからこそ、私たちは「勉強」という道具を使って「学ぶ」のです。